

# 全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■第5章「命」

3月15日午前6時半ごろ、東京電

力福島第一原発の免震重要棟では社

員たちの退避が続いていた。2階の

対策本部にいた医療班加藤由美子

(37)の視線の先には、中央の円卓の

傍らに立って、残る人員の名前を赤

シートボードに書き込んでいる第2

復旧班長奥田史朗(56)の姿があっ

た。奥田さんも残るつもりなんだ。

「自分たちがこの免震棟から退避

させられるというとは、残る人た

ちが死ぬというを意味している

と思います」

加藤は、原発の技術的な知識を教

えてくれた奥田を恩師として慕って

7

## ホワイトボードの墓標



1 大阪駅前配られた福島第1原発からの放射性物質漏れを伝える号外。2011年3月15日

# 刻まれた残留者名

いた。もう空えない。そう思った加

藤は対策本部を出ようとする人波を

かき分けて奥田に近づき、そっとう

をだいた。

「頑張ってください」

せめて一言、そう伝えただかったの

だ。奥田は黙ってうなずいた。伸び

たひげがこの5日間の苦闘を物語っ

ていた。

ここで泣いてはいけない、と加藤

は思った。ここで泣くとは、残る

者たちに失礼だ、と。加藤はその時

の奥田の顔を忘れることができな

い。「悲壮な感じでした。どこかで覺

悟を決めたように、いろんなものが

入り交じったような表情でした」

対策本部にはもう数えるくらいし

か人が残っていないかった。それまで

の騒がしさがそのような静けさだ

った。ホワイトボードには復旧や発

電、保安など各班で残った社員たち

の名前が書き込まれていた。

それはまるで墓標のようだった。

2号機で炉心溶融(メルトダウン)

が起きているのは疑いようがなかっ

た。敷地内の放射線量が上昇してい

る理由はそれ以外に考えられない。

だが海水注入の態勢を維持する以

外、もうできることは何もない。

所長の吉田昌郎(56)が奥田に歩み

寄った。吉田にとって奥田は最も信

頼する部下であり、友人だった。盟

友2人が円卓の脇で向き合った。

「おい奥田。所員はみんな、おま

「何ってんの、吉さん」

真意を測りかねて、奥田は吉田の

顔を見た。

何かあってもうったえなな。

目がそうつしていた。俺だからつる

たえたら若い連中が動揺する。だが

ら最後の瞬間まで毅然と対応しつ

と。

一方、免震棟1階に降のた加藤は

出入り口付近で全面マスクを奪い合

う社員たちを見た。もともと全員に

行き渡るほどの数はない。

加藤は不織布マスクを着けて免震

棟を出ると、同僚の自家用車に乗っ

た。動きだした車の後部座席で、徐

々に小さくなっていく免震棟から自

あの中にはまだ人がいる。吉田き

んも奥田さんも…。そう思うと涙が

止まらなかった。(敬称略。年齢

肩書は当時。共同通信 国分伸矢)